

Title	巻頭言
Author(s)	鎗水, 徹
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2024, 24, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97778
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

巻 頭 言

サイバーメディアセンター

OUDX 推進室

教授 鎗水 徹

大阪大学の中長期的な経営ビジョン「OU マスタープラン 2027」では、「コロナ新時代における情報基盤整備」として教育・研究・経営のDX (Digital Transformation) を実現することを掲げている。

私は、大阪大学のDXを推進するべく、実務家教員として2022年10月にサイバーメディアセンターに着任し、1年数か月が経過した。

DXを進めるにあたり、“D=Digital”を実現するより、“X=Transformation”を実現することのほうが難しい、と言われる。それはIT屋にとって、自己完結できるITソリューションを導入する“D”より、これまでの仕事のやり方や組織全体を変革する“X”のほうが格段に難しいからである。つまり「組織全体を変革する」とは、その組織に所属するひとりひとりの思考・行動様式を変革することに他ならないからである。

特に阪大のように、約4万人いる教職員、数十個所に及ぶ部局の自治が確立している組織において「全学でDXを実現するにはどうしたらよいか」という課題に早々に直面した。またDX推進リーダーが一様に悩む「人がいない」、「お金がない」、「どこから手を付けたらよいかわからない」といった課題も例外ではない。

こうした課題を克服するには、「大学全体を一度に変える」のではなく、まずは地道に「仲間を増やす」、「コストを削減し予算を捻出する」、「コアバリューに着目する」ことが重要だと考え、教職一体となり日々取り組んでおり、この動きを阪大全体に広げていきたいと考えている。

阪大のコアバリューは、学生・卒業生・教職員・研究者・地域住民などの阪大を構成するコミュニティーのひとりひとりが持つ知識・経験・社会的役割と考える。現在、こうした「阪大人財」の持つ情報を集約・統合・活用し、阪大の教育・研究・経営に役立てる「人財データプラットフォーム」を構築中である。このプラットフォームは、教育面において本学SLiCSセンターが目指している「入学前から卒業及び修了後までの教学データを蓄積・管理・分析・活用すること、当該データを基盤とした個別最適な教育及び学習・学生支援を全学的に実現するとともに、本学の中長期的な教育成果を可視化すること」にも活用することを目指し、SLiCSセンターの先生方と協働して取り組んでいる。

DXと称するいずれのプロジェクトにおいても、とかく我々IT屋が陥りがちな「機能要件を満たしたITシステムを構築することで完了」ではなく、我々が構築したITシステムで「ユーザー（学生・卒業生・教職員・研究者・地域住民などの阪大コミュニティーの人々）が喜んでいる姿」をイメージしてプロジェクトを完遂することが重要である。こうした着実な積み重ねを行うことで阪大全体のDXが実現すると考え、取り組んでいく所存である。